
G

こむぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G

【ZET-ア】

Z5890D

【作者名】

「むぎわ

【あらすじ】

いじめられっ子で吃音の少女が夏休みをさかに成長していく。
普遍的テーマを切なく美しく描く純文学。

小さい頃地球は真ん丸と知り何故南半球の人は地球から落ちないのか、と不思議に思つた事があった。

宇宙から見れば上も下も無く、地球上の物は何でも地球の引力によつて地球に引きつけられているので落ちない。地球から離れないのだと知つた。

あたしの視界に広がる風景は全て地面に引きつけられている。酸素、海、街、心遣い。それぞれが乱れないように生活を淡淡と送つているのだ。引力によつて。

・・不思議。

質量の大小によつて引き合つ力の大きさは変わるが、二つ物体には必ず引き合つ力が発生するんだもんね。

磁石でなくても引き合つのだからとても不思議。

クラスメートの篠崎君が一枚の古地図を見させてくれた。

生徒達の帰つたがらんとした教室は夏色の夕日で染まつていた。錆びた欠片を集めたような古地図はひどく優しい夢のようであたしは人生で初めての目眩を覚えた。

小学校4年1学期の終業式の朝、あたしはいつものようにクラスメートにいじめられていた。教室に入るとあたしの机が教壇の隣りにあつた。

皆の冷たい視線を避けながら、机を引きずり元の位置へもどす。戻す途中でデリカシーの欠片もない担任教師が入つてくる。

「おい、土屋。何やつてんだ？」
あたしは顔を上げられずにうつむいたまま「すっすっすっすいません。」そこここで失笑がこだまする。

あたしは物心ついたときから吃音に悩まされ続けている。

顔が火照り、なのに血の気が引いてゆく。それでも何とか机を戻し、着席した。空気が濁る。こんな事、日常茶飯事だ。

いつからだろ、あたしは心を働かせることを葬った。

窓側の席とも暫しあ別れか。ま、でも明日から夏休みが始まる、当分ここへ通わなくていいんだ。何て事をグラウンドを見ながら何気なしに考えていた。デリカシーの欠片もない担任は、夏休みの連絡票の説明をしている。誰も聞いちゃいない。皆、明日からの予定に胸を躍らしている。

あたしは何の為に学校へ通っているのだろう。失笑される為? 皆はあたしを道化師にしたいのか。いや、もうくだらない事を考えるのはよそう。あたしは明日から自由の身なんだ。

ホームルームも終わり、荷物を全て持つて帰らなくてはいけない為、教室後ろのロッカーへ行くと、大量の「ゴミ」があたしのロッカーに捨てられていた。体操着やらと入り交じつてあつたので分別するのにかなり手間取ってしまう。体操着を丸めランドセルに押し込もうとした時、一枚の紙切れが体操着に挟まっていることに気付いた。キレイに四つ折りされた紙切れだつた。静かに広げてみると、それは手紙だつた。

『土屋さんへ 話があるので夕方まで教室で待つていてほしい。

篠崎』

・篠崎クン? 話? えつ? 驚いたあたしの鼓動はみるみるうちにスピードを増していった。あたしは何故か慌ててその手紙をスカートのポケットに入れた。

篠崎クンがどうしてあたしに話があるのでだろう。篠崎クンとは殆ど口を聞いた事がない。他のクラスメートとも元々喋らないあたしだけど、篠崎クンは皆と何かが違う。人をいじめたりする様なタイプではなく、近寄り難い雰囲気の人間だ。転校ってきて半年そこそこだからなのか、どこか冷たく淋しそうである。怖そうでもある。

そんな篠崎クンがあたしに何の用があるというのだろう。

あたしはランドセルを机の上に起き、席に座った。グラウンドに立つ銀杏の葉の小さな揺れを見つめながら、あたし自身も期待と不安に揺れていた。

ふと、思った。篠崎クンの指す夕方とは何時だろう。3時？4時？5時？今現在は正午。後どれくらい待てばいいのだろう。そんな事よりあたしは初めて他人から貰った手紙にドキドキしていた。窓からの景色、全てに意味があるように思え何処へでも飛べそうな予感さえしていた。

気付けば夕方4時半を回っていた。まだ篠崎クンの姿は見えない。やはりただのイタズラか？でも篠崎クンはそんな下らない事をする様なタイプではないし。

あたしは待つ。ひたすら待ち続けた。お尻が痛くなり何度も席を立つた。教室の端から端まで何歩あるか数えたりした。

お腹は空かなかつた。朝御飯も大して食べていなかつたが空腹は感じなかつた。

誰も居ない何もない教室は全てが眠つているようで太陽だけが少し眩しかつた。小さな声で少し歌つてみた。出来るだけ小さく歌つた。その時、廊下から足音が聞こえた。自分の世界にまみれていたので吃驚して一瞬、背筋が凍つた。

足音が止まる。篠崎クンはあたしのすぐそばに居た。7時5分前だつた。

「あ、遅くなつてごめん。」早口で篠崎クンは謝つた。

「ちょっと用が長引いて。。。」

「うん。そつそれで、なつ何？」

篠崎クンは急いでやつてきたらしく、静かに呼吸を整えてる。あたしは唾を飲んだ。予想以上に、ゴクリと大きな音が響き渡り、思わず息を止めた。

しばらく沈黙が続いた。どれくらい続いたのだろう。あたしの心臓

は真夏にも関わらずほぼ硬直状態で芯が冷えきつていった。陽に焼け果てたグラウンドの砂を背に寝そべりたかった。

「僕の伯父さんは政府の人なんだ、そしてお父さんは考古学者なんだ。」篠崎クンは言つた。

「伯父さんとお父さんの内緒の話を聞いたやつたんだ。」篠崎クンは続ける。

「お父さんの研究論文にイギリス政府の都合の悪いことがあって、奈良にあるなにかの証拠をイギリス政府より先に見つけないとお父さんの命が狙われる可能性があつたんだ。」篠崎クンは冷静に淡々と語つてゐる。あたしは鳩が豆鉄砲を喰らつた状態だ。

「で、その証拠を見つける為の地図を日本政府に渡したんだけど、お父さんはキーワードを教えなかつた。イギリス政府もそれを解つてなくて、結局どちらも見つけられなかつたんだ。」

篠崎クンの口調がとてもキレイな標準語なので、あたしは聞き惚れてしまつた。去年初めて聴いたカーペンターズの歌声のよつだつた。酷くキレイで夢をも感じた。

話の内容はあまり飲み込めなかつた、と言つより理解し難かつた。映画のようなストーリーだ。何だつて？政府？証拠？イギリスつてどこだつけ？

篠崎クンはランドセルから何かを取り出しながら続ける。

「この間、お父さんが僕に打ち明けてくれたんだよ、イギリスも日本も大人達は大切な何かを見失つてゐるって。宝物とは自由な心なんだつて。」

「もう危険はなくなつたから、お前が探せつてコレを貰つたんだ。」
と言つながら篠崎クンは、琥珀色の古地図をあたしに差し出した。

墨で細部まで精巧に描き込まれたその地図は、むしろかなオーラを放っていた。かなり古い物である」と、そしてそれはあたし達のいる奈良の地図である。

「これ、なつ奈良の地図やん!」あたしの口をついた言葉は、吃音奈良弁。自分を呪つた。

「あんな、あたしの言葉、きつきつ聞き取りにくいやろ? かつかつ関西弁やし。」胸が空回りしながら喋るせいか自分が思つてのより大きな声が出てしまつ。この場から逃げ出したくなつた。

「そんなことどうでもいいよ。」篠崎クンは無表情に言いながらもその瞳からはこれ以上のない温かさが漏れていた。

「そう、この地図はここ奈良の地図さ。300年前のね。」

「天神山を中心半径2kmの地図なんだ。この4km四方のどこかに答えがあるんだ。へんな風にとらないで欲しいんだけど、僕はその答えに招待されてる。誰だかわからないけど夢の中で確かに僕を呼び起こすんだ、奈良へ引っ越して来たその夜から。多分、手にした地図がハヤクコイつて言つてるんだ。」

篠崎クンは真つすぐな眼差しで冷静に、完璧な口調で言つ。あたしは肩が強張つた。まるで虚構の糸に縛られた操り人形のように。篠崎クンの完璧な口調、眼差し、それら全てがあたしの想像を遙かに超越している。あたしの心臓はそのエネルギーに押し倒され、トコトコと小刻みな脈を打つていていた。

古地図を見つめ、ふと思いついた事を言つてみた。

「何でそんなことあたしに話すん?」あ、つまらずに言えた。あたしの脳に住む小人達が歡喜の舞を魅せた。

篠崎クンは続ける、「忍耐力のある女の子がどうしても必要だつた。お父さんに言われたんだ、忍耐力のある少女と探せつて。」

目がすぼんだ気がした。

「土屋さん、いつもいじめられてるのに反抗もしなければ歯向かいもしないし、だから。」

「そうか。いじめられてるからか。その上登校拒否はしないし、人前では泣いた事もない。反抗しないのは悪化を恐れてるからだ。いじめられてる人間にしかわからないだろう。忍耐力があるんじゃない、余裕なんてない。あたしは無力で弱い人間なんだ。」

頭がつーんと熱くなつた。涙が溢れた。悲しいんじやない。嬉しかった。ちゃんとあたしを見ていた人が居た。

しばらく涙が止まなかつた。雨のようになつた。鼻水は滝のようになつた。あたしはハンカチを持っておらず、手で涙を拭い、懸命に鼻を啜つた。恥ずかしい、これほど酷い姿はない。よりもよつて男子の前で。

篠崎クンは何も言わずに冷静に、ポケットからハンカチを出してくれたがあたしはそれを受け取れなかつた。あたしには篠崎クンが眩しそうだ。

「『ごめん、もう大丈夫。』鼻を鳴らしながら言つた。

「そつそれで、あたしはどうすればいいん? につ、忍耐力はない方やと思うねんけど、。。」考えてみれば、同じ年の男子と普通に話すのは初めてだ。いささか緊張はしてるが、ちゃんと話してる。ごく自然に。それにとても気分が良い。

「一緒に、探しに行こう。」篠崎クンはイメージ通りの口調で言つた。

「う、うん。わかった。」先ほど意識したからなのか声が少し震えた。泣いたからなのか唾を飲み込んだら塩っぱかつた。

夕日が滲んで篠崎クンの肩越しにあたしの未来が少しだけ見えそうな気がした。

宝物のように預かつた古地図を抱え走つて帰つた。今日は大変な一日だった。

日だった。まだ頭が混乱している。直ぐさまお風呂へ入り湯槽に浸かる。心は高ぶり頭はボーッとして腑抜けになつた手足は溶けそうだ。そのうち湯氣で息苦しくなつた。

勉強机の椅子に腰を下ろし扇風機を回す。カルピスを飲みひと息ついた。えつと、頭の中を整理しよう。手紙をもらつて、夕方まで待つて、政府がどうのこうので、不思議な地図を見て、あたしの忍耐力が必要で、一緒に答えを探しに行く、篠崎クンとあたしが。、あたしと篠崎クンが。、2人で。駄目だ、混乱してる。どうしたつていうんだ。考えようとすればするほど混乱する。疲れた。細胞が疲れている。考えるのは明日だ。明日、考えればいい。

ベッドで横になると静寂と闇が素早くカンタンにあたしを覆つた。その闇に溶けるように落ちていつた。

目が覚めたら朝の7時だった。お腹が空いていた。お母さんが作ってくれたホットドックを2個も食べ、カルピスも2杯飲んだ。

部屋に戻つて古地図を開いた。地元のそれも家の近所の地図である。越してきて半年あまりの篠崎クンよりあたしの方が何か読み取れるかもしぬれないということになつたのだ。

ジッと目を凝らして答えを求めた。でも読み取れなかつた。300年前の地図なので細部が現在と殆ど変わつていて。

ただ眺めてるだけでは答えの欠片は降つてきそうになかつた。古地図に掌を滑らせてみる。この感触は和紙だ。それも上質な。しかし多くの人がこの古地図に触れたんだろう、所々がシワになり折れ目が入つている。あたしは古地図に文珍を幾度も這わせ、シワを伸ばした。そして勉強机に付いている電球で照らしてみた。何もない。窓を開け放ち太陽の光で透かしてみた。何も出ない。集中して見つめる。やはり何も出ない。あたりまえか、政府でさえ何も読み取れなかつたのだ。

この地図には必ず何かトリックが仕掛けある筈だ。微々たる思考

を巡らす。やつだ、肉眼ではなくサングラスで見てみよつではないか。

台所に立つお母さんの手を盗み、電話横に雑然と置いてある車のキーを握り締めた。ひやりん。キー ホルダーが受話器に触れた。

「あ、理恵ちゃん、どうか行くの？」お母さんはシンクに突っ込んだ手を動かしながらこちらを見た。

「う、ううん。別に。」あたしは慌てて車のキーを背後に隠した。お母さんは少し首をかしげたが、特に気にする様子はなかつた。あたしは足音を立てぬよう慎み深く歩きガレージに止めてある車まで辿り着いた。恐々とキーを差し込んだ。勝手にこんな事をするのは初めてだ。運転座席の上に付いてある印除けのようなものにサングラスは吊り下げる。素早く拝借し、ドアを閉めた。

急いで自分の部屋へ戻り、早速サングラスをかけて古地図を見つめる。5分、10分、少しも変化はなく何も見つけられなかつた。床に座りベッドに背をもたせかけた。少し不安になつた。どうすれば良いんだろう。そもそもあたしなんかが読み取れるものなのか。しばらく意氣消沈していたが、お母さんの騒がしい声で我に返つた。

「理恵ちゃん、車の鍵がなくなつたんやけど知らんー？ちょっとと来てー。」

「理恵ちゃん、さつき何してたん？」訝しげな面持でお母さんは言う。あたしは答えられずに居た。

「なあ、聞いてんの？」お母さんは急かす。

「う、うめえ。くつ、車の中に忘れた。」

「どうこいつこと？」お母さんはオクターブ低い声で溜め息混じりに聞く。ヤバい状況だ。古地図の事は何が何でも言えるわけがない。

「んあつ、向かいの佳美ちゃん達と志村けんのだいじょうぶだあ

「じつこをやる約束でさ、あたしは田代まさしの役やから小道具にサングラスが欲しかつてんつ！せやから借りてんつ！」咄嗟の出鱈目な言い訳だった。

「そんならちやんとお母さんに言うてから借りればいいやろ、車乗られへんやんか。合鍵もないねん。お母さん仕事行かなあかんのに。今日は夜勤やのに。」いやはやと言わんばかりにお母さんは呆れ果てた様子。（ちなみに土屋家ではお母さんしか車の運転をしないのだ。）

取り敢えずあたしはこの場から逃れる事ができた。思いの外、気の利いた言い訳だったかもしない。しかし車の中に鍵を置き忘れたミスは反省だ。

お母さんは電話機の下の棚からタウンページを取り出した。車屋に電話するそつだ。

あたしは小さく頭を下げて謝り、自分の部屋へ戻つた。そしてまた古地図を眺めた。

「、」そうだ、火で炙つてみるのはどうだろ？。こないだ理科の実験でもそのような事をやつた。だが火を使うとなると1人で試すのは少し危険。

あたしは篠崎クンに相談してみようと思った。昨日、電話番号を教わり手の甲に書いておいたんだ。左腕を持ち上げる。番号が半分薄れていた。一瞬焦つたが、よくよく見ると消えてるのは市外局番の方だった。

あたしは引き出しから小銭を取りスカートのポケットに入れ、公衆電話に向つた。鼓動は高く鳴り響き、浮き足立つていた。

あたしは篠崎クンと秘密を共有しているんだ。これまであたしの中のどこかで停止していた歯車が動き出し始めているように感じた。足元にある道は果てしなくどこかへ続いてる。こんなあたしでも歩けないはずはない。

公衆電話ボックスの扉を開けた。ここに入るのは人生で2度目だ。鍵つ子のあたしは1年前クラスメートにいじめられた時に首にぶら

下がた鍵を奪われて家に入れなくなつた事があつた。そして公衆電話でお母さんの仕事先に電話をしたのだ。

考えてみればあたしは鍵という存在で失敗する。鍵というものは何か閉ざしているものを除き通れるようにするものだ。あたしは自らの手で蓋をしていたのかもしれない。じじ開けようとせず心まで葬つていたのかもしれない。

受話器を手に取り、声を出して喋る練習をしてみた。駄目だ。吃音パレードだ。土屋という名前も篠崎という名前もつまりやすい。手足をバタつかせ30分近く練習していた。成果はあった。ジャンプしながら言うと比較的つまらざ何回か言えたのだ。このテンションが落ちないうちに電話しよう。

ゆっくりボタンをプッシュする。手が小刻みに震える。受話器を持つ手は耳にぶつかるほど震えていた。

「はい、篠崎ですが。」落ち着いた女性の声だった。

緊張がピークに達し、電話ボックス内あるだけの面積で暴れまくりジャンプしながら言つたが出た言葉がこれだった。最悪だ。さつきの練習の成果が全く発揮されておらん。

「はい、少し待つてね。」女性はあたしのささやき取りにくらい声に全く動搖せず、冷静だった。やはり篠崎クンのお母さんだ。そして電話口で、なおきー、と篠崎クンを呼んでいる声が聞こえた。あたしは全身が火照り、恐らく目は泳いでいた。

「もしもし、土屋さん？」
「もっ、もっ、んともおもしもし。ひ、ひ、ひ、ひ、土。。。」「ダメだ、駄目だ。

「会つて話そよ。4丁目にあるスーパー オークワわかるよな? 30分後にそこで。いい?」

そんなわけで人生二度目の公衆電話は惨敗してしまった。ふう、疲

れた。塞ぎ込んでいる場合じゃない。あたしは帰宅し、古地図をリュックサックに入れてお気に入りのTシャツに着替えオークワを指した。

篠崎クンが居た。学校以外で初めて会う私服姿の篠崎クンは少し大人びて見えた。

オーケワの駐車場の端にあたし達は座り込み、今までの状況を一通り説明した。火で炙る作戦に篠崎クンも賛成してくれたのでオーケワでライターとうまい棒（明太子味）2本を購入した。篠崎クンが全て支払ってくれた。

「どこで作戦決行しようか？火を使うから人目に付かない場所が良いね。」篠崎クンはあたしに問う。あたしは一瞬にして閃いた。

「あ、あたし、この近所に秘密基地あるねん。そこならまず人は来やんよ。」

そう、あたしの秘密基地。4年前の夏に見つけた場所。当時大阪から引っ越してきたばかりだったあたしは学校帰り探検がてら近所を散策した。通った事のない道をぶらぶらと歩いていると一面の荒れ野原に古びたマイクロバスがぽつんと佇んでいた。あたしはそのバスがとても気に入った。

共働きの親を持つあたしは誰も居ない家に帰るのが淋しかった。そして恐かった。誰も居ない片付いた部屋に居ると孤独感にひしひしと襲われ、よりあたしを独りぼっちにさせた。まるで世界から見放されたように。

そうして頻繁にそのバスへ足を運ぶようになった。いじめられ始めた時はそこで泣くことができた。そして温めてくれた。秘密基地。ある日、近所の公園に子猫が捨てられていた。物凄くなつてくる可愛い子猫をあたしは放つて置けず家に連れて帰った。お母さんに隠して自分の部屋で飼っていたが、2日目にしてバレた。猫はずつと鳴いていた。公園ではなついていたのにどうしてだろうと思った。お母さんに元の場所に戻すよう言われたが、そこへは行かず秘密基

地へ連れて行つた。そこでも猫は齧え鳴いていた。2週間程はそのままバスで飼つていたが、いつの間にかいなくなつてしまつた。子猫の都合は考へていなかつたのだ。

猫という動物は生まれ育つた場所が自分の縄張りであり成長するに従い自分の足で行動範囲を広げて行く、という事を後になつて知つた時、心が痛んだ。だからあの子猫は齧えて鳴いていた。今も思い出すと涙が溢れ出る。

錆び付いたドアを開けると、篠崎クンは真っ先に運転席を陣取った。仕方なくあたしはすぐ横の補助席に座った。本当のあたしのお気に入りは最後部右座席なのだ。いつもその席から荒涼とした野原に沈む夕日を眺める。クラスメートの理不尽な要求や教師の心ない言葉の記憶を広々とした景色に吸い取つてもらつていたのだ。でも今日は違う。天から降つてきた急な命令に戸惑いながらも、胸の奥底から力が涌いてくる。まるで入道雲のようにぐんぐんと。あたしは必要とされてるんだ。その時、遠くの空で稻妻が光つた。

しばらく運転席の計器類を触つていた篠崎クンは踵を返し本題へ入る。

「いきなり直火で炙るのは危険じゃないかな？燃えないくらいの微妙な熱さじやないと、フライパンとかあるといいんだけどな。」

「あつあるで。中華なあ、鍋やけど。」あたしがここを見つける前に誰かが住んでいたのだろう。あたしはバスの外側にある扉に篠崎クンを案内した。篠崎クンは中華鍋とキャンプ用の五徳を持ちながら「完璧！！土屋さんすごい。あとは薪だね。」と喜んでる。

「そつそつそれもあるで。」薪ではないが、壊れた窓を直そうと思い、バスの下にベニア板や角材の切れ端を集めてあつたのだ。あたし達2人はまるでキャンプのように焚き火を熾した。火事になるといけないので、消化器も用意した。もっともゴミ捨て場から拾つてきた物だから、使えるかどうかわからないけど。

中華鍋は丁度いい火加減になつた。火が移るといけないので、薪の数を減らした。あたしは地図の両端を持ち、フワリと中華鍋に落とした。高鳴る胸の鼓動を抑えながら、地図の細部まで注視した。篠崎クンは銀色の腕時計を左手に持ち、時間をはかる。

まだ変化は無い。永遠にも思える時間。もうましいか？あと少し。

ぎりぎりの判断を迫られる。ピカッ！その時だつた。突然の霹靂と共に大粒の雨が滝のように降り出した。熱せられた中華鍋に雨粒が落ちギュンギュンと音をたてる。モウモウと水蒸気が立ち上がる。あつという間の出来事で、腕がすくんで地図を取り上げられない。どうしよう！

篠崎クンが被つていたキャップ帽をミトンのよつに使い、地図を引き上げた。そのままバスへ走り込んで行つた。あたしも後を追う。真夏のスコール。突然の出来事にお互い言葉をなくした。地図は無事だつた。相当、頑丈な和紙なのだろう。思つた変化はなかつたので火炙り作戦も失敗に終つたようだつた。

あたし達は無言のまま席に座る。フロントガラスに激しくぶつかる雨をただボーッと眺めていた。去年の夏休みも雨の日にここにいたことを思い出した。クラスメートの誕生日を祝うと称したあたしをいじめる会で散々いじめられた帰りにバスに逃げ込んだのだつた。浴びせられた罵声や迫害を夕闇に吸い取つてもらつたのだ。でも今日の出来事でそんな記憶も過去になりつつある。

「あれーっ？なんだこれ。」篠崎クンは裏返つたひょうきんな声を上げた。

「見てみてーーーこれ見てーーーほら、ここんとこ。」大声を出しながら地図の裏面を指差した。

「どつどこ？あつ！なんやのーーこれ。」地図の裏面の数カ所に盲人用図書みたいなポツポツができる。とても不自然に。

「濡れたからだ。というより蒸したから、だね。」キラキラと瞳を輝かせて篠崎クンは言つた。

「そつそやね、こつこれがトリックやつたんかな？でも、なつ何を示してんのかようわからんなあ。」二人は顔を見合わせた。

「でももつちよつと蒸したらまだ何か出るかも。どうしよう、蒸氣か、ーー。あつ、そうだ！スチームアイロンだ！」篠崎クンは自問自答して答えをだした。

「あつあん雨止んだら、あーたしん家来いへん？おつおつ母さん今

夜やや夜勤や一やんねんん。」言いたい思いが強いため、こんなになってしまった。頑張れ、あたし。

「うん、じゃあ雨が止んだら土屋さん家に行こうよ。」篠崎クンはやさしく微笑んだ。幾分か救われた。

男子を自宅に招くのも無論初めてだ。

あたしの家はごく普通の小さな一軒家だ。築20年なので外観が諸、一昔前のセンスで見た目は良い方ではない。部屋はキッチンと掃除してるので不潔ではないが何よりインテリアのセンスが悪い。裕福ではないので貴い物や中古で購入した家具を、センスの一欠片もないお母さんがレイアウトしてるだけ。それらを見られるのが少し恥ずかしかつたが、篠崎クンは微塵も興味のない様子だった。

2階のあたしの部屋に招いた。

「どうどうどうじこでも、いいいいから座つてつて、アイロン取つてくるわーあつ、のつ喉、乾いたな、カルピス飲む？」

篠崎クンは女の子の部屋に入った事があるのだろうか。特に緊張してる様子もない。あたし一人が焦つて空回りしている。自分の空間に他人が入ると調子狂うもんなんだなあ。あたしはそんな具合に目的とは関係のない事を思案し、押入れからアイロンとアイロン台を取り出した。

するとアイロン台の柄があまりにもみつともない上にこかしこ疲れ、変色もしていた。アイロン台の代わりに座布団を代用する事にした。

部屋に戻り篠崎クンにカルピスを手渡した。

「お腹空いたからコレ食べよ。」とオーケワで買ったうまい棒を篠崎クンは差し出した。

お互に無言で食べた。ムシャムシャというあたじがあらゆる音の中で一番嫌いな音だけがここにあった。

「さて、始めようか。」

「うつうん。」

スチーミュアイロンには水が入っていたのでそのままコンセントに挿した。温まるまでの暫しの沈黙にいたたまれずその辺に落ちてあつたジョンテンバーのアルバムを団扇代わりに汗が滲む額を煽いでいた。

ランプが消えた。準備完了だ。あたしはアイロンを手にした。

押し付けないでね。」篠崎クンは心配そうな目であたしを見た。

「わーかつてゐる。毛糸のセーターの要領やな。」鍵つ子のあたしは

家事が得意なのだ。

アイロンを水平にするとショーショーと勢いよく蒸気が出る。それをそのまま地図に近づける。

「ボチボチが並んでる真ん中の辺りからお願ひ」と篠崎クン。あたしは小さな円を描くように蒸気をあてた。

一
〇
〇
〇

卷之三

・・・・・ でたー中央のポチポチは児童に鳥居のマークになつていた。

「やつたあ——！」2人は嬉しさのあまりハイタッチを交わした。あたしは興奮して肩を揺らし右手小指がアイロンに当たった。たまらなく痛くて熱かつたが我慢した。これも忍耐力の筈。

吸を吐き出しながら言つ。

マークに見入る。

あたしはもう一度蒸気をあてた。慎重に丁寧に、地図全体を蒸氣で埋め尽くした。蟻の巣ひとつひとつを取り調べるよ！」

地図上の鳥居マークから10センチ程離れた左上に奇妙なポツポツが、、。

「なんだろ?」
「これ?」

「うーん。」このマークよつわからん。」あたしは両手を伸ばし古地図を天井に向けた。さっきの火傷がヒリヒリと小刻みに皮膚を刺して痛い。そして古地図を裏返し照明に透かした。

「あつっ！－このボツボツ、アルファベットの、G、になつてゐる－」

「ほんとだ！－土屋さんす、」いじやん。」篠崎クンに褒められた。嬉しい。

「せ、せやけだ、G、つてぢつぢーゆつ意味や。300年前の日本この地図やのアルファベットつてへんやなあ。江戸時代や。」首を傾げる。江戸時代といえば浮世絵の暑苦しい画像しか思い浮かばない。浮世絵はじつして「ロードロードおじいおじい感じのものばかりなんだわ。」

「兎に角、この記号が現代の地図上のあるあるか確かめないと。」

高田の図書館に住む地図の本つてあるよ。」

あたし達は明日、図書館に一緒に行く約束を交わした。

篠崎クンは礼儀正しく「お邪魔しました。」とあたしに頭を下げ、帰つて行つた。

しんと静まり返つた部屋は篠崎クンの匂いだけが残つていた。その香りは独りぼっちの空間にそつと魔法をかけ優しくあたしを温めてくれた。

ひとつも怖くない初めての夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5890d/>

G

2010年10月8日16時11分発行